

平成24年度 淀川水系流域委員会【地域委員会】 淀川水系河川整備計画に基づく事業等の進捗点検に関する 報告書に対する主な意見

淀川水系河川整備計画について、危機管理・治水・維持管理・人と川とのつながり・河川環境・利水・利用の各分野において、平成21～23年度の進捗状況について、点検を行った。主な意見は以下のとおり

◎進捗点検の方法や指標に関する主な意見

◆危機管理分野

・指標は開催回数となっているが、協議会に参加した人の効果が測定できるようにすべきである。また地域や行政としてはそれぞれ境界があるが、災害としては一つなので地域に縛られず住民、市町村、府県、国の連携が必要である。

・進捗点検をする際、会議回数だけではなく参加者の内容（例えば親子、若い女性、リピーターなど）も確認することで、会議の効果を多様な視点で測れるのではないか。

◆治水

・進捗点検の数字については絶対値ではなく実施すべき値に対する進捗の比率にしたほうがいいのではないか。

・点検結果の所に、全体の進捗率が一目でわかるような工夫をしていただきたい。また何年までに完了するのかなどは地元も興味があり、整備計画期間の前半、中頃というオーダーで示すことも必要である。

◆人と川とのつながり

・河川レンジャーの進捗状況を、現在のような河川レンジャーの人数や交流内容・回数では把握出来ない。何と何をつないだかや連携した相手の変化などを盛り込むべきである。

・それぞれの河川において、河川レンジャー制度を検討している機関（琵琶湖河川レンジャーであれば「河川レンジャー制度運営委員会」）があるはず。その機関が各河川におけるレンジャーの現状や課題、成果に関して議論を行った結果の概要を、河川間で共有する必要があるのではないか。

・いい川にしていく整備にどれだけ河川レンジャーが関わったかを新たな指標に設けてはどうか。

・河川レンジャーの指標として、活動プログラムをどう組み立てているかがわかる指標を新たに設けてはどうか。

◆河川環境

・城北ワンドなど湛水域にイタセンパラが増えたのは、人の手で外来魚を駆除した結果であり、市民参加の成果として活用されるべきであり河川環境が改善したということではない。イタセンパラが増えたのは元々いた場所でなく、違う場所に移っている。また、イタセンパラの増減には直接つながらない環境改善を実施している箇所もあるため指標には向いていない感じがする。

・指標としてイタセンパラが挙がっているが、なぜイタセンパラなのかという事にも繋がるものとして、淀川流域のレッドデータブックのようなものを整理し、イタセンパラ以外の他の生物の経年的変化なども把握している中でイタセンパラを保全しているという資料があれば、一般の人にも分かり易くなるのではないか。

・魚道の改良の成果は遊泳力の強いアユやビワマスだけを基準にするのは疑問である。もっと身近な魚、小さい魚が点検結果に表れてくることが望ましい。例えばハゼが一種類でも加えられるくらいでないと本当の連続性の評価は出来ない。

・人が河川環境を回復しようとする活動をしているところについては、環境がよくなるということだけではなく、人と川とのつながりが強まり、維持管理にもつながっていくという視点から整備をすすめていただきたいし、そういう指標をいれていただきたい。

・1つの地点でいくつかの事業が実施されているケースがあるため、事業評価をする際、事業対象地域に関連する複数の事業を地図上で把握し、それら事業の影響も含めて総合的に効果を整理すべき。

◆利用

・水辺の楽校について、小学校区ごとに水辺に近づける場所・安心して遊べる箇所をチェックしてもらいたい。

小径について、整備された全体延長が記載されているが、「ここだけは整備しないと歩けない」「整備した結果、これだけの延長がつながり整備効果があった」といった整理ができないか。

◎事業の実施手法や進め方、実施結果等に関する主な意見

◆危機管理分野

・まるごとまちごとハザードマップに広域的な情報として、浸水深や最寄りの避難所の方向（逃げる方向）の矢印の表示なども必要。

・水害に強い地域づくり協議会は、災害後に開催すると参加者も多く、危険意識も高まることになると考えられるので検討されたい。

・若年層は忙しく、協議会に参加できないことも多いのでWEBを使ってつながりを持つようにすることが重要である。そのためハザードマップ等の情報がウェブ上で閲覧できるか確認することが必要。

・勉強会に参加しても、その場だけで終わっている。一般の方々が勉強会を受けて、実際に自分たちで歩いてみる所まで出来ていない。自分で踏み出すところまで持って行ける工夫が必要。

・マニュアルを作るプロセスの中で、住民が被災時をイメージし、その対処について自分自身のこととして考えるトレーニングをするためのツールとして、ハザードマップを扱うのが良いのではないか。また、被災時にマニュアルがどのように利用されたかを調査することも大切。

・アンケートやハザードマップは配布するだけでなく関心をもってもらうことが大事。そのためには現在の街の状況や内在する危険を知らせることから順番にレベルアップしていくことが必要。

◆治水

・桂川掘削の現場でデレーケの水制の遺構が出たが、遺構を残すように掘削形状を工夫していただきたい。

・治水事業の効果やスーパー堤防等の変更の考え方についてもっとわかりやすく説明すべき。

・事業等の優先順位をマクロ的に説明する工夫があると良い。

◆維持管理

・伐採した樹木について無償提供をされているが、実施日が平日だけである。土日にしか行けない市民もおり、うまく捌けるような工夫をいただきたい。また伐採についても市民団体などに委託することによりコスト縮減にもなり、なにより自分で管理をしているという意識にさせることができ、それが今後につながってくるため検討していただきたい。

◆人と川とのつながり

・河川レンジャー活動をしたという結果を記録としてマップ化し、蓄積されてくるとどこにいるんやという話はなくなると思う。もちろんそういう地図で計りきれない活動もあるので、そこは何か工夫あるといいのではないかと思う。

・各河川での河川レンジャーが活動しているフィールドを示し、活動内容毎で色分けをするなどした図面があると議論をする際の参考になる。

・市民活動の評価はどのように行うのか、整備局として何を期待しているのかということは以前より疑問にあった。市民団体にどのようにインセンティブをもってもらえるのかなど、答えは難しいが、意見交換を行う中で方向性を見いだせないか。

◆河川環境

・イタセンパラなどの絶滅危惧種を保全する事業と並行して、今までの川で見られていた人が川とふれあう環境づくりもきちんと行っていただきたい。

・ワンドの再生をすることにより河川環境が再生し、イタセンパラや他の生物環境も良くなってきているという調査結果もある。イタセンパラ1種を保護していくのではなく、淀川水系で象徴的なイタセンパラを保護することにより、在来種全体が良くなってきている。また、城北ワンドでは外来魚駆除の成果もあり、タナゴ類が増加している。

・イタセンパラを食べる外来魚を駆除したから良いということではなく、トータルの環境として場所ができて初めて河川環境が保全・創出されたことになる。水位操作を工夫する中で、象徴的な場所を作るのも今後の課題。

◆利用

・例えば小径整備においては計画に段階から情報を発信していくプロセスがあれば、管理の段階でも地域の人々との協力がうまく進むのではないか。